
女の子が女の子を好きになった話

うい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子が女の子を好きになった話

【Nコード】

N0803Z

【作者名】

うい

【あらすじ】

男がレス話を書くところなる！

「飛鳥、君のことが好きなんだ！」

僕は放課後の、夕日が差し込む教室で叫んだ。

目の前の髪の毛長い女の子は、目を丸くしてこちらを見ている。

「へ？ お、オレえ？」

「うん……」

やっと言えた、という気持ちと、後悔の念で心の中がぐちゃぐちゃだった。

「僕、飛鳥のことが好きなんだ」

もう後には退けない。

精一杯、気持ちをぶつける。

このずっと温めてきた気持ちをひたすらに言葉として彼女にぶつけた。

「優……」

「付き合いたい。飛鳥と」

目を真っ直ぐ見て言った。
だが、

「ごめん、優。オレ、そういうの、分かんないんだ」

なんとなく予想していた言葉が返ってきた。

そりゃそうさ。女の子同士だもん。

「友達のまま……」

「待って！」

飛鳥が、告白を断った時の古い言い回しを言おうとするのを止める。

「まだ、諦めきれてないから」

「そう、か……」

友達の関係が、このまま終わってしまいそうな、そんな不安感が僕の心に残り、僕たちはそのまま家に帰った。

事の発端は、些細と言えば些細だった。

一人称が『僕』な僕は、とても変な子だったのだ。

今までいじめは無かったけど、女の子の友達は出来たことが無かった。

高校でも、なんとなくそうなるんだろうな、と思っていた。
で、皆の自己紹介の時だ。

「僕、浅葉優って言います。よろしくお願いします」

私、って言おうとしたのに、つい僕と言ってしまった。
もちろん、変な空気になる。

先生が次の子を呼んだのを聞いて、ホツとしながら席に着いた。

「オレは伊奈茂飛鳥です。よろしくお願いします」

その子も変わっていた。

妙に男っぽい口調で、強気で、似たような物を感じた。

お互いに変な者同士だったから、すぐに仲良くなった。

もちろん、周りもそんな変な僕たちを見て、陰口を言うけど、すぐに飛鳥が止めるように言ってくれた。

飛鳥はいつの間にか、僕にとってのヒーローになっていた。

好き、なんて感情が生まれたのは予想外だったけどね。

「お、おはよう。飛鳥」

朝の学校で、げた箱で飛鳥が靴を履き替えているのを見て、声をかけた。

一瞬、飛鳥の肩がビクツと震えた。

でもすぐにこちらを見て、「おはよう、優」と返事してくれた。

休み時間、飛鳥は僕を避けるように行動するようになった。

昼休みだって、毎日一緒にお弁当を食べていたのに、食堂へとそそくさと行ってしまう。

それが何日も続くようになった。

いつも一緒にいるのに、何日も離れたままだと周りだって敏感になる。

やれ彼氏を取り合ってるだとか、やれ喧嘩しただとか。

前者は有り得ないけど、今が後者ならすぐに仲直り出来るのに。

「ねえ、飛鳥」

僕は飛鳥がどこかへ消える前に捕まえた。

目の前の飛鳥は、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「どうして僕を避けるの？」

「そ、そんなつもり無えよ……」

「嘘だよ。もしかして……僕が……好きだって、言っただから？」

重要な部分は誰かに聞こえるかも知れないので小声で言う。
その僕の科白に、飛鳥は顔を引きつらせた。

「んなわけないよ。あはは」

「嘘。顔、笑ってない」

「……」

「僕のこと、気持ち悪いと思ったの？」

「……」

「君を好きになったから、気持ち悪いと思ったの？」

「違う……」

「えっ？」

怒気のこもった声が、飛鳥の口から漏れた。小さく、抑えたような声だった。

「オレは、オレはアンタが嫌いになったわけじゃねえ。ただ、ただ……」

肩を震わせている。

なんだか、僕が飛鳥をいじめているような気分になった。

「ただ……？」

「いや、これは放課後に言うよ」

そう言って、飛鳥は僕の肩を押して、フラフラとどこかへ行ってしまった。

放課後に何があるんだろう、とぼんやりと考えているうちに、放課後になった。

飛鳥に引つ張られて、屋上へと連れてこられる。

「飛鳥？」

「……」

黙ったままの彼女の肩に触れようとすると、その手が握られた。

「えっ」

「優……」

彼女の、強気な目が僕に向けられた。

「な、なに？ 飛鳥」

「オレ、優にヒドいことをした」

「な、何を？」

「オレも同じ気持ちだったのに、優の気持ちを知った途端に、怖くなっただ」

そう言って、僕の唇と飛鳥の唇が重なられた。

頭が思考停止して、なんて言おうか思いつかない。

そつと離れた飛鳥の唇を、ただじつと見ていた。

「オレも好きだ、優」

ツーっと、目から暖かい何かが流れた。それは、飛鳥の細い指でなじられ、拭き取られる。

「泣きたいのは、オレだって」

飛鳥も泣いていた。

そしてまた僕たちは、唇を重ねあった。

正式に付き合いは始まった。

お泊まりだつてしたし、お風呂にだつて、一緒に入つたし、飛鳥と裸になって抱き合った。

誰にも知られなかったのも奇跡だったと思う。

でも、やっぱり周りから見たら仲の良い友達なのかも知れないと思うと、少し寂しい。

「これからも、好きでいてくれ、優」

ブカブカのパジャマで僕の横に寝ている飛鳥が言った。

「もちろん。僕と飛鳥は、ずっと一緒だよ」

「ありがとな」

そんな、普通じゃない、ちょっとおかしい僕たちの高校生活でした。

（後書き）

さあ、この二人を男に変換して読んでみな！
優はまさるって読んでね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0803z/>

女の子が女の子を好きになった話

2011年12月2日23時45分発行